

広島県西条盆地のコウホネ属植物

著者	下田 路子
著者別表示	Shimoda Michiko
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	39
号	1
ページ	1-8
発行年	1991-06-15
URL	http://doi.org/10.24517/00055905

下田路子*：広島県西条盆地のコウホネ属植物**

Michiko SHIMODA* : *Nuphar* from the Saijō Basin,
Hiroshima Prefecture, Western Japan**

Abstract

Three kinds of *Nuphar* occur in the Saijō basin, Hiroshima Prefecture. The first one is identified as *N. japonicum* and characterized by having a yellow stigmatic disk and exposed leaves which are floating or emersed, usually glabrous to slightly pubescent, rarely densely pubescent on the lower surface. The second one is smaller than *N. japonicum* and characterized by having a red stigmatic disk, flattened hollow petioles and exposed leaves which are always floating and pubescent below. The latter plant is regarded as a new variety of *N. oguraense*, var. *akiense* SHIMODA. The third plant is characterized by having a red stigmatic disk and exposed leaves which are floating or emersed as in *N. japonicum* and pubescent as in *N. oguraense* var. *akiense*. This plant is regarded as a new variety of *N. japonicum*, var. *saijoense* SHIMODA. The *Nuphar* of the Saijō basin shows considerable variation not only in the shape and size of the leaves but also in the floral parts within the same taxon. Unfortunately, the irrigation ponds of the Saijō basin, including the habitats of *Nuphar*, are threatened seriously by land development and water pollution at present.

Key Words: New varieties—*Nuphar japonicum*—*Nuphar oguraense*—Saijō basin

日本のコウホネ属 *Nuphar* を北村・村田 (1961) と田村 (1982) は 4 種 1 変種 1 品種に、また大井・北川 (1983) は 4 種 2 変種に分類している。また田村 (1974, 1982) は、コウホネ属の変異が強く、4 種の区切りが必ずしも明らかでないことを指摘している。

広島県東広島市にある西条盆地一帯のため池には、3 種類のコウホネ属植物が生育している。

一つは、大型で水上葉が挺水し、柱頭盤が黄色いことからコウホネ *N. japonicum* と同定される (Figs. 1, 2)。

第二の植物は、小型で水上葉は浮葉性で葉柄が偏平、中空な点ではオグラコウホネ *N. oguraense* に相当するが、柱頭盤が赤い (Figs. 3, 4)。

さらにもう一つ、コウホネに似るが、第二の植物と同じように水上葉の裏面に毛が多く柱頭盤が赤いものがある (Figs. 5, 6)。

このうち、赤い柱頭盤を持つ後二者は、上記の文献中にはあげられていない。そこで、第二の小型のものはオグラコウホネの変種と考え、ベニオグラコウホネと呼ぶことにしたい。また第三の、大型のものはコウホネの変種と見なし、サイジョウコウホネと呼ぶことにする。なお、西条盆地の水草に関するこれまでの報告 (下田, 1983; SHIMODA, 1985) で

は、コウホネとサイジョウコウホネは「コウホネ」、ベニオグラコウホネは「オグラコウホネ」となっている。

本研究では、これら 3 種類のコウホネ属の形態を比較し、柱頭盤の赤い 2 種類をそれぞれ新変種として記載する。またコウホネ属の生育地であるため池の現状も簡単に報告しておきたい。

原稿を校閲していただいた鈴木兵二博士、コウホネ属の分布について貴重な情報をいただいた三上幸三・橋本卓三両氏に厚くお礼申し上げたい。

本研究には昭和 63 年度広島大学教育研究学内特別経費の補助を受けた。

調査地と調査方法

西条盆地は東西約 12 km, 南北約 10 km, 標高 200 m 前後の盆地で、花崗岩、流紋岩、花崗斑岩などからなる標高 400-600 m の山地に取り囲まれている。盆地には西条砂礫層あるいは西条湖成層と呼ばれる礫、砂、粘土からなる第四紀の堆積層が広く分布している。盆地南部では湖成層の開析が進み、台地地形が発達している。盆地内の丘陵地や台地、盆地周辺の山麓など至るところに、多数の農業用のため池がつくられており、盆地の自然環境を特徴づけている。

* 〒730 広島市中区東千田町 1-1-89 広島大学理学部植物学教室 Botanical Institute, Faculty of Science, Hiroshima University, Higashisenda, Naka-ku, Hiroshima 730, Japan.

** Contribution from the Phytotaxonomical & Geobotanical Laboratory, Hiroshima University, N. Ser. No. 405

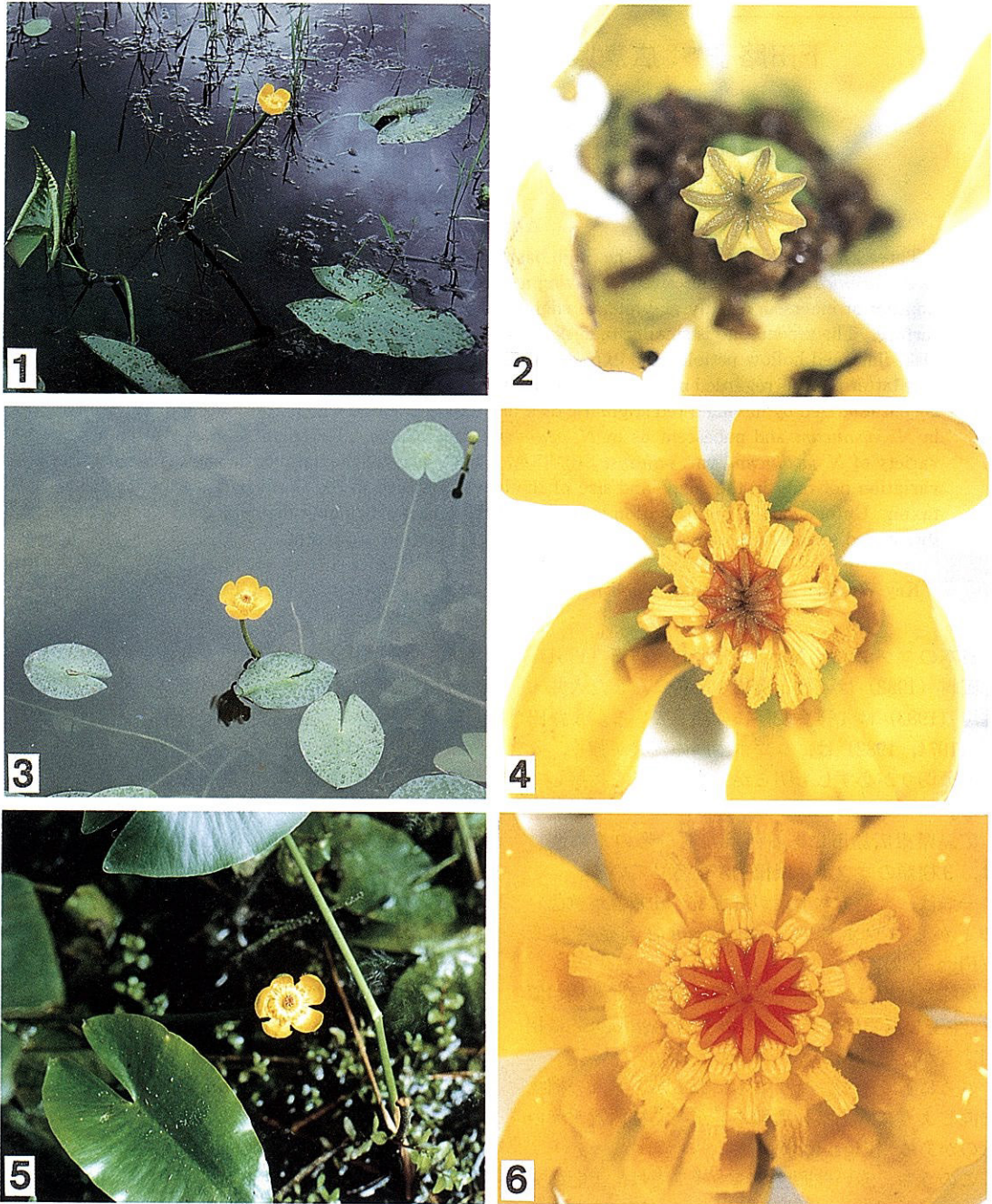


Fig. 1. *Nuphar japonicum* from pond 17, see Fig. 7 (Sept. 9, 1989).

Fig. 2. Flower of *N. japonicum* from pond 2, see Fig. 7, showing a yellow stigmatic disk (July 22, 1986).
× 2.5.

Fig. 3. *Nuphar oguraense* var. *akiense* from pond 7, see Fig. 7 (Sept. 5, 1989).

Fig. 4. Flower of *N. oguraense* var. *akiense* from pond 39, see Fig. 7, showing a red stigmatic disk (July 22, 1986).
× 2.5.

Fig. 5. *Nuphar japonicum* var. *saijoense* from pond 54, see Fig. 7 (June 27, 1989).

Fig. 6. Flower of *N. japonicum* var. *saijoense* from pond 2, see Fig. 7, showing a red stigmatic disk (July 22, 1986).
× 2.5.

1973年に広島大学が当時の賀茂郡西条町に移転することに決まり、翌1974年には「賀茂学園都市構想」をかかげて東広島市が発足した。さらに1981年より広島県は西条盆地を中心とする「広島中央テクノポリス」建設計画の基本構想の策定を進め、1984年には開発計画が国の承認を受けた。これらの動きにもなつて、西条盆地では大規模な土地開発が次々と行われるようになった。

著者は1986-1989年の6月から10月の間に、ため池に生育するコウホネ属植物の分布調査と採集を行った (Fig. 7)。ただし、調査期間中に花を確認できなかった池は Fig. 7 から除外した。採集した標本は、柱頭の形態や葉柄の構造などに特に注意して、生の状態で外部形態を観察し、その後にくさくさ葉標本とした。また、1978-1985年に採集したくさくさ葉標本についても、葉と花の外部形態を検討して、その結果も採用した。

コウホネ属各種の特徴

西条盆地に生育するコウホネ属植物の識別において重要であると考えられる水上葉と花の形質を Table 1 にあげ、各種類を比較した。また Figs. 8-10 には、それぞれの浮葉を示した。次に各種の特徴について述べる。

1. コウホネ *Nuphar japonicum* DC. (Figs. 1, 2)

水上葉は水が深い場合は浮葉となるが、浅いところでは挺水性となり、柱頭盤が黄色のものをコウホネと見なした。

水上葉：水上葉の長さは12.5-29 cm、幅は7.5-18.5 cm でかなりの変異幅をもつが、葉長は15-25 cm、葉幅は10-15 cm のものが多かった。葉長は葉幅の1.3-1.9倍のものがほとんどであったが、2.2-2.4倍にもなる細長いものもわずかながらみられた。普通、裏面には毛がほとんどないが、またはあっても密生するほどには多くはならない。しかし例外として、葉裏に毛が多く、特に縁には密生するものが隣り合った三つの池(16-18:以下かっこ内の数字は Fig. 7 の池の番号を示す)にのみ生育していた。

葉柄は中実で、径は上部で4-7 mm、下部では13-14 mm になるものもあった。

花：柱頭や柱頭盤の形は変異が大きく (Fig. 11)、柱頭が細いもの (Figs. 2, 11 a) も、太いもの (Fig. 11 b, c) もあり、また柱頭が数本ゆ着したような形のもの (Fig. 11 d) もあった。柱頭は同じ池ではほぼ似た形をしているが、数は同じ池でもかなりの変動がある。花糸は葯と同長かやや長く、葯のほぼ2倍になるものもあった。

分布：コウホネは盆地北部に多く、中央部の鏡山

東麓および盆地南部にも2か所ずつ見られた。鏡山の東麓では Fig. 7 に示した二つの池 (46, 47) の他に、隣接する五つの池でもコウホネと思われる集団を確認したが、調査期間中には花が見られなかった。

2. ベニオグラコウホネ (新称) *Nuphar oguraense* MIKI var. *akiense* SHIMODA, var. nov. (Figs. 3, 4)

A typo disco stigmatis semper rubro differt.

Nom. Jap.: Beni-ogura-kôhone (nov.).

Hab.: Japan. Honshu. Pref. Hiroshima: Saijô-chô and Hachihonmatsu-chô, Higashi-Hiroshima City; Kurose-chô, Kamo-gun.

Holotypus: M. SHIMODA No. 4713, Sept. 24, 1986 (HIRO). Pond 13 in Fig. 7.

柱頭盤が赤く、水上葉が小型で挺水しないものを、オグラコウホネの新変種とした。

水上葉：ベニオグラコウホネの浮葉はコウホネより明らかに小さい (Fig. 9)。また葉長に対し葉幅がコウホネより広く、長さが幅の1.1-1.6倍まで変動がみられたが、1.2-1.5倍の範囲のものが多かった。裏面には毛が多く、特に縁には密生する。葉柄は扁平で中空となり、径は2-3 mm で明らかにコウホネより細い。

花：柱頭盤は黒ずんだ赤、鮮かな赤、オレンジ色に近いものまであり、また周辺部がわずかに黄色あるいは黄緑になるものがしばしば見られたが、全体が黄色のものは全く見られなかった。柱頭盤の形態の変異は大きく (Fig. 12)、丸いもの (Fig. 12 a, b)、楕円形のもの (Figs. 4, 12 c) などがあり、花時に楕円形であるものは果実が熟すにつれてより長い楕円形になった (Fig. 12 d)。柱頭の数には6-14までみられたが、8-11のものが多かった。花糸は5.5-18 mm、葯は3-5 mm で、花糸は葯のだいたい2-4倍である。

分布：3種類のコウホネ属のうちではベニオグラコウホネの生育地が一番多く、西条盆地では39か所で分布を確認した (Fig. 7)。また西条盆地の南方の賀茂郡黒瀬町宗近柳国でも、生育地を1か所確認した。ベニオグラコウホネがコウホネやサイジョウコウホネと混生する池はなかった。北米のコウホネ属植物の柱頭盤はしばしば赤い (たとえば BEAL, 1956) ので、日本でも今後ベニオグラコウホネに該当するものが他の場所で見つかるかもしれない。

なお著者は1987年8月に双三郡三良坂町で、また1988年9月に世羅郡世羅町・世羅西町でオグラコウホネを採集したが、広島県東部のこれらのオグラコウホネはいずれも柱頭盤が黄色であった。

タイワンコウホネとの比較：台湾に固有のタイワンコウホネ *N. shimadae* は、葉裏に毛があり葉柄が中空な点でオグラコウホネに似ている (MIKI,

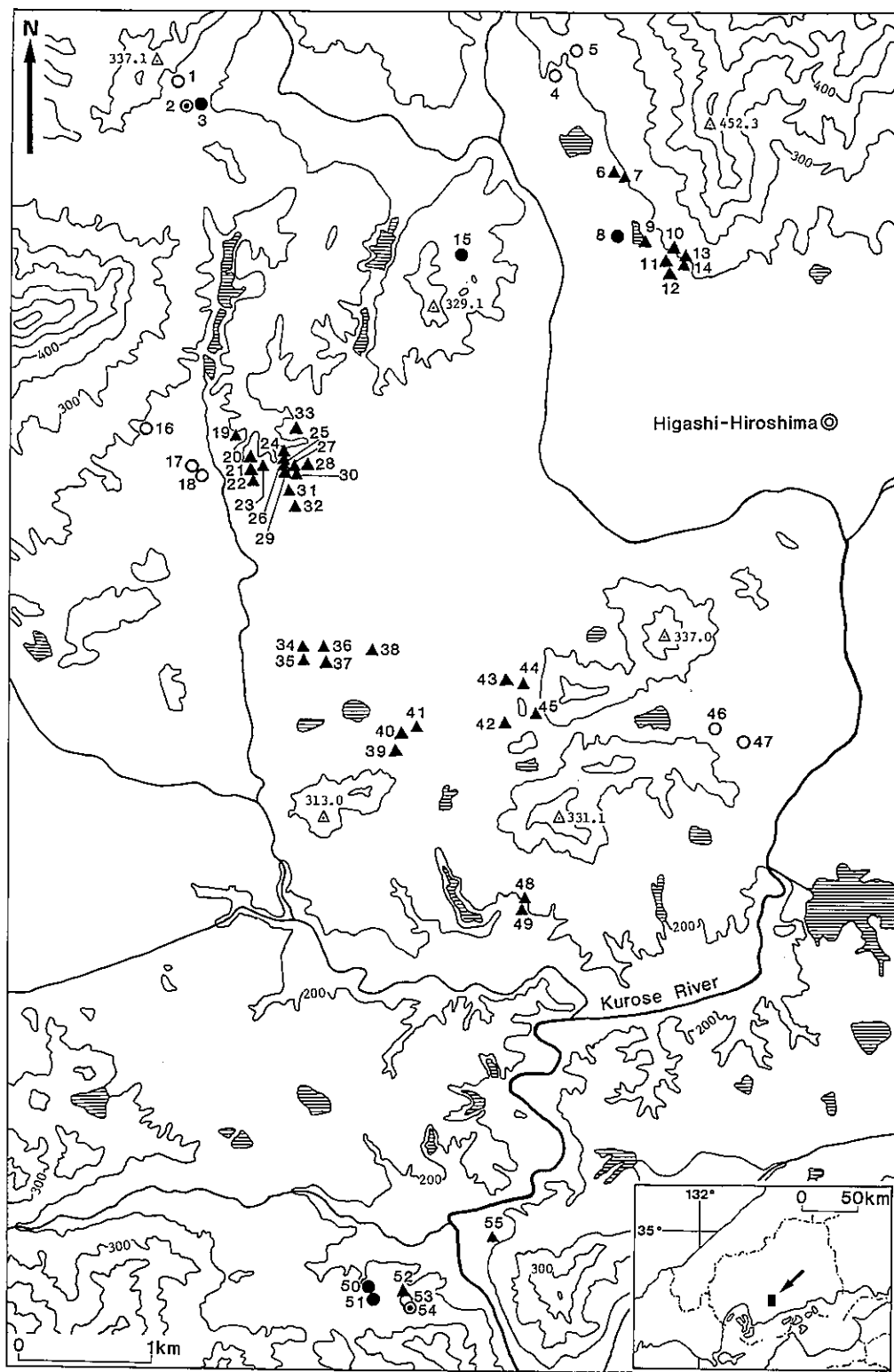


Fig. 7. Distribution of *Nuphar* in the Saijō basin.
 ○ : *N. japonicum*. ● : *N. japonicum* var. *saijoense*. ⊙ : *N. japonicum* and *N. japonicum* var. *saijoense*.
 ▲ : *N. oguraense* var. *akiense*.

Table 1. Comparison of exposed leaves and floral parts of three kinds of *Nuphar* growing in the Saijō basin.

Character	<i>N. japonicum</i>	<i>N. japonicum</i> var. <i>saijoense</i>	<i>N. oguraense</i> var. <i>akiense</i>
Exposed leaves			
Leaf type	floating or emersed	floating or emersed	floating
Shape of leaf blade	narrowly ovate to ovate	ovate	broadly ovate or broadly elliptical
Degree of hairiness of lower surface	glabrous to slightly pubescent, rarely densely pubescent	pubescent, especially near the margins	pubescent, especially near the margins
Length of leaf blade	12.5-29cm	12-23cm	6.7-14cm
Width of leaf blade	7.5-18.5cm	7.1-14.5cm	4.2-10.7cm
Length/width ratio of leaf blade	1.3-2.4	1.3-1.8	1.1-1.6
Shape of petiole	stout, terete and solid	stout, terete and solid	slender, flattened and hollow
Diameter of petiole	4-14mm	3-9 mm	2-3 mm
Floral parts			
Colour of stigmatic disk	yellow	variously red-tinged	variously red-tinged
Diameter of stigmatic disk	6-11mm	6-9mm	5-9.5mm
Number of stigmatic rays	5-14	9-14	6-14
Shape of stamens	filaments 1-2 times as long as anthers	filaments 1-3.5 times as long as anthers	filaments 2-4 times as long as anthers

1934; 三木, 1937)。タイワンコウホネの柱頭盤は赤いので、ベニオグラコウホネとの比較が必要と考え、著者は1988年に台湾北部桃園県のため池でタイワンコウホネを採集した(下田, 1988b)。

タイワンコウホネは柱頭盤が赤いほか、水上葉が広卵形で挺水せず、葉柄が中空である点ではベニオグラコウホネと似ている。しかし桃園県のタイワンコウホネの浮葉と果実の形には、ベニオグラコウホネとは異なる次のような形質が認められた。すなわち浮葉の表面はひどくざらつき、また裏面には毛がより多く、特に縁では密生する。また果実は、ベニオグラコウホネでは幅9-23mm、長さ15-28mmで、花柱と柱頭を合すると長さは22-40mmで細長い形になるのに対し、タイワンコウホネでは幅15mm、長さは9-19mm、花柱と柱頭を合わせても12-22mmで球に近い形である。

なお三木(1937)は、オグラコウホネの種子が小、タイワンコウホネの種子が大であるとして両種の区別点の一つとしている。しかし著者が採集した標本の種子は、ベニオグラコウホネで長さ3-5mm、幅2.5-3.5mm、タイワンコウホネで長さ4mm、幅3mmで、両者の区別点となるほどの明らかな差は認められなかった。

3. サイジョウコウホネ(新称) *Nuphar japonicum* DC. var. *saijoense* SHIMODA, var. nov. (Figs. 5, 6)

A typo disco stigmati semper rubro et folio

subtus pubescenti ut in *N. oguraense* var. *akiense* differt.

Nom. Jap.: Saijō-kōhone (nov.).

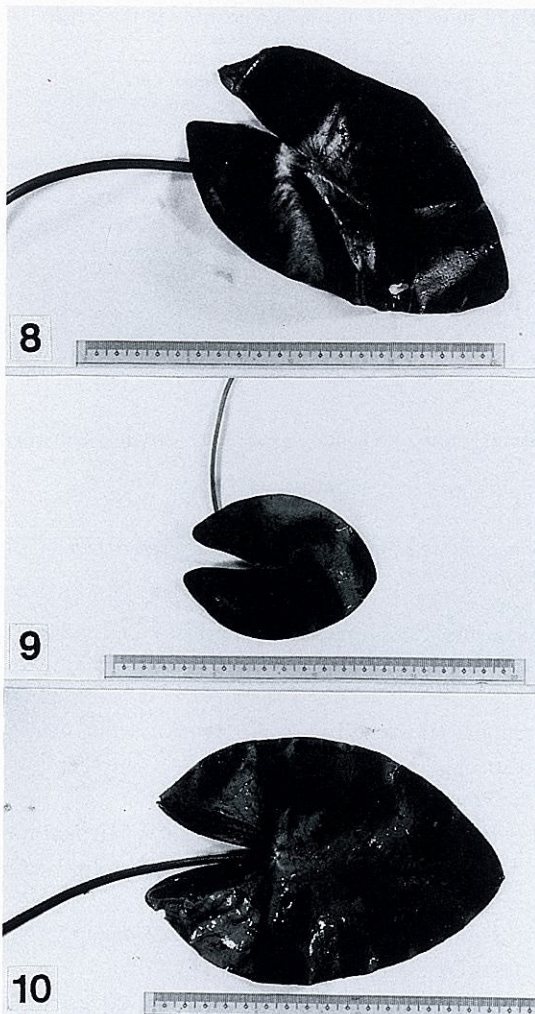
Hab.: Japan. Honshu. Pref. Hiroshima: Saijō-chō and Hachihonmatsu-chō, Higashi-Hiroshima City.

Holotypus: M. SHIMODA No. 4742, June 27, 1989 (HIRO). Pond 50 in Fig. 7.

コウホネに似て水上葉が挺水し大型であるが、葉裏に毛が多く柱頭盤が赤い点ではベニオグラコウホネにも似るものを、サイジョウコウホネと呼ぶことにする。サイジョウコウホネは、コウホネとベニオグラコウホネの特徴をあわせ持ち、また葯と花糸の長さの比が両者の中間的な値である(Table 1)ことなどから、両者の交雑の結果生じた可能性も考えられるが、ここではコウホネの新変種とした。

水上葉: 水が浅い所では挺水し、コウホネと非常によく似ている。しかし葉裏には毛が多く、特に縁は密生してピロードのような感触になる。葉の大きさや形にはかなりの変異幅があるが、ベニオグラコウホネよりは明らかに大きい(Fig. 10)。葉形は卵形で、コウホネに見られるような長さが幅の2倍以上になる細長いものはなかった。葉柄は中空、径は3-9mmで、コウホネのような10mm以上のものはなかった。

花: 柱頭盤の形は変異が大きく(Fig. 13)、また周辺部がわずかに黄色または黄緑となるものもあった。柱頭の数は9-14で変異の幅は5に過ぎず、他の



Figs. 8-10. Three kinds of floating leaves in *Nuphar*. 8: *N. japonicum* from pond 1. 9: *N. oguraense* var. *akiense* from pond 39. 10: *N. japonicum* var. *saijoense* from pond 3.

二つでは変異幅が9および8であったのに比べれば変異の幅がずっと小さい。花糸はまれに葯と同長のものも見られたが、ほとんどは葯より長く、葯の1.3-3.5倍であった。種子は長さ4-5mm、幅3-3.5mmで、コウホネ、ベニオグラコウホネとの明らかな差は認められなかった。

分布：サイジョウコウホネは盆地の北部と南部に分布し、中央部には見られなかった。また、コウホネと混生する池が2か所あった(2, 54)。このうち大芝池(2)ではコウホネの個体数が年々減少しており、1989年には花を確認できなかった。また、池54は約15m×10mの小さな池で、池の約3/4をコウホネが占め、サイジョウコウホネは西端の約1/4

に生育していた。

井波(1982, Pl. II-38)の「オゼコウホネ」について：井波(1982)は広島県中部台地に生育する柱頭盤の赤いコウホネ属植物の図を示し、これを「オゼコウホネ」としているが、同時に今後の検討が必要であるとの指摘もしている。この図は三上幸三氏が大芝池(2)で採集された生品を描いたものである(三上私信)。この「オゼコウホネ」は柱頭盤が赤く、葉裏に毛があり、葉柄は中実なので明らかにサイジョウコウホネである。大芝池とその隣の新開池(3)では、柱頭盤の中央部がくぼんだもの(Fig. 6)のほか、柱頭が柱頭盤の中央まで伸びたものがしばしば見られるので(Fig. 13 a)、柱頭盤の中央が隆起している井波の図もこのようなものから描かれたと考えられる。

考 察

1. コウホネ属植物の形態

田村(1974, 1982)は、日本のコウホネ属の変異が強く、種の区切りが必ずしも明かでないとのべている。また欧米では、コウホネ属の多形性を指摘・考察する論文が見られる(たとえばSCHUSTER, 1906; HESLOP-HARRISON, 1955; BEAL, 1956; DEPOE & BEAL, 1969)。最近日本でも、従来の記載と一致しないコウホネ類の報告があり(角野, 1984; 長瀬, 1987; 石沢, 1988)、今後各地で調査が進めば、コウホネ属植物の変異がより明らかになってゆくであろう。

西条盆地のコウホネ属の水上葉と花の形態について以下にまとめておく。

水上葉：葉身の大きさや長さや幅の割合は3種類ともかなりの変異幅があった。ベニオグラコウホネは他の2種類に比べて明らかに小さく、葉長に対し幅が広く葉柄は細く中空であるため、水上葉のみでも同定が可能である。サイジョウコウホネの水上葉は裏に毛が多く、特に挺水葉では肉眼でもはっきりと毛が見えることが多い。しかしコウホネでも、葉裏に毛が多いものがまれに見られたので、水上葉の特徴からコウホネかサイジョウコウホネであるかの推定を避けて、調査期間中に花を見なかった池はFig. 7から除外した。

花：花の大きさは3種類の間に明らかな差は認められなかったが、それぞれの種類内での変異が見られ、葯と花糸の長さの比にも、それぞれの中でかなりの変異幅があった。

柱頭の形はコウホネが最も多様で太いものや細いもの、数が多いものや少ないものなどの様々な形が見られ、三木(1937)や北村・村田(1961)の柱頭盤の図とはかなり異なるものが多い。

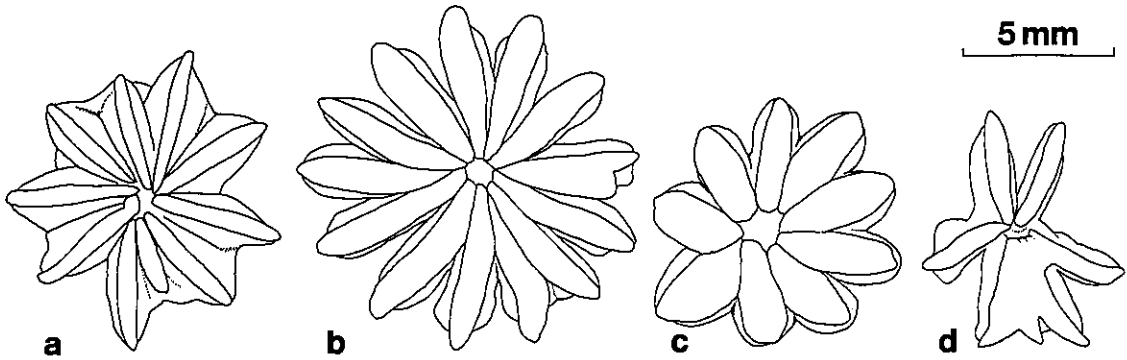


Fig.11. Various stigmatic forms of *N. japonicum* sampled from ponds 1(a), 17(b), 53(c) and 16(d).

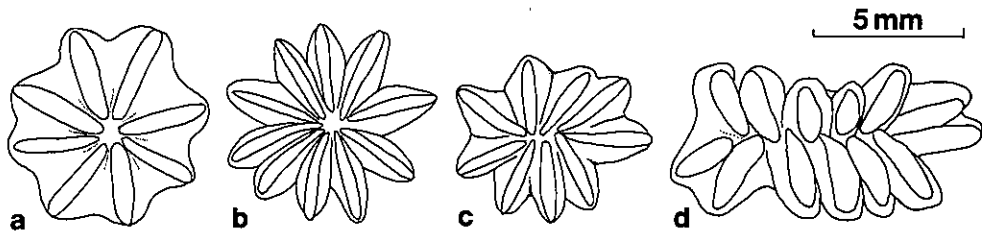


Fig. 12. Various stigmatic forms of *N. oguraense* var. *akiense* sampled from ponds 21(a), 14(b), 13(c) and 48(d). The stigmatic disk of the fruit sometimes becomes compressed as (d).

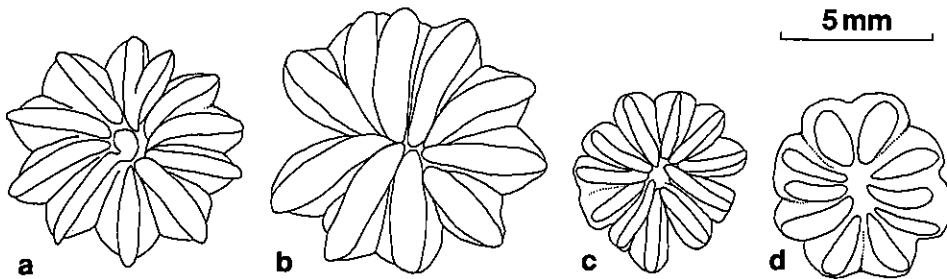


Fig. 13. Various stigmatic forms of *N. japonicum* var. *saioense* sampled from ponds 3(a), 50(b), 15(c) and 54(d).

ベニオグラコウホネでは柱頭が極端に太いものはないが、数はかなりの変異幅がある。柱頭盤は丸いものからやや楕円形のものまでいろいろな形が見られる。

サイジョウコウホネも柱頭が極端に太いものはなかった。柱頭盤は先が尖るものや丸いものがあり、形は多様である。

ベニオグラコウホネとサイジョウコウホネの柱頭盤は全て赤いが、色合はオレンジ色に近いものから暗赤色まであり、また周辺部がわずかに黄色や黄緑色になるものもあった。

2. 生育地の現状

コウホネ属植物の生育環境や群落についてはあら

ためて報告する予定なので、ここでは西条盆地のため池の現状を簡単に紹介しておきたい。

すでにのべたように、盆地中央部への広島大学の統合移転、広島中央テクノポリス構想の出現などにより地域開発が進行中で、西条盆地の自然環境は急速に変わりつつある。1970年から始まった米の生産調整(減反)で休耕田が増えた(下田・鈴木, 1981)うえ、宅地化によって姿を消す水田が多くなると、不用になるため池が出てきた。長年管理されていない池、水をぬいたままの池、埋め立てられた池などがすでにあるばかりでなく、今後も農地や山林の宅地化などの土地開発にともなって、姿を消す池は増えていくと思われる。

コウホネ属をはじめとする池の水草も、このよう

な盆地の環境変化の影響を受けるようになってきた。土地開発は短期間で直接に池の環境を変える。たとえば池の周囲で土木工事が行われた場合、池そのものを埋め立ててしまい、全ての水草が消滅した例(49)や、池は残ったが水草相が大きく変わり、コウホネ属も姿を消した(40; 下田, 1989)例があった。一方、周辺で大規模な土木工事が行われたわけではないのにコウホネ属が消滅したり(38)、個体数が減少した池(3)があった。これらの池では調査期間中に水草相が変化し、現在は池一面にヒシが繁茂しているため、汚水の流入などにより人為的な富栄養化が進んだものと考えられる(下田, 1983)。

西条盆地のコウホネ属植物は、今のところ西条盆地に特有と考えられる種類を含み、植物学的に大変興味深く貴重な地域集団であるが、残念ながら姿を消す集団が今後も増えていくであろう。著者は機会があるごとに、ため池と水生生物の価値や保全を訴えるよう努めている(下田, 1988 a, 1990)。しかし際立った経済的価値を持たない池沼や水生生物の保全は、西条盆地で進行中の急激な土地開発や地価高騰を前にしては非常に困難である。

引用文献

- BEAL, E.O. 1956. Taxonomic revision of the genus *Nuphar* SM. of North America and Europe. Journ. Elisha Mitchell Sci. Soc. 72: 317-346.
- DEPOE, C.E. and BEAL, E.O. 1969. Origin and maintenance of clinal variation in *Nuphar* (Nymphaeaceae). Brittonia 21: 15-28.
- HESLOP-HARRISON, Y. 1955. *Nuphar* SM. J. Ecol. 43: 342-364.
- 井波一雄. 1982. 広島県植物図選 II. 100 pls. 博新館, 広島.
- 石沢 進(編). 1988. 新潟県植物分布図集第9集. 533 pp. 植物同好じねんじょ会, 小千谷.
- 角野康郎. 1984. 兵庫県東播磨地方における溜池の水生植物. 植物地理・分類研究 32: 127-135.
- 北村四郎・村田 源. 1961. 原色日本植物図鑑. 草本編 II. 離弁花類. 390 pp. 保育社, 大阪.
- MIKI, S. 1934. On fresh water plants new to Japan. Bot. Mag. Tokyo 48: 326-337.
- 三木 茂. 1937. 山城水草誌. 京都府史蹟名称天然記念物調査報告 18: 1-127.
- 長瀬秀雄. 1987. 岐阜県高山市に新分布の植物. 植物地理・分類研究 35: 56.
- 大井次三郎(北川政夫改訂). 1983. 新日本植物誌頭花篇. 1716 pp. 至文堂, 東京.
- SCHUSTER, J. 1906. Ueber den Polymorphismus bei *Nuphar*. Allg. Bot. Zeitschr. 12: 79-83.
- 下田路子. 1983. 広島大学統合移転地およびその周辺部に分布するため池の水草. 植物地理・分類研究 31: 46-57.
- SHIMODA, M. 1985. Phytosociological studies on the vegetation of irrigation ponds in the Saijo basin, Hiroshima Prefecture, Japan. J. Sci. Hiroshima Univ., Ser. B, Div. 2, 19: 237-297.
- 下田路子. 1988 a. 西条盆地の溜池と水草—新キャンパスとその周辺部を中心として—. 広大環境 13: 11-15.
- . 1988 b. 台湾の旅. 水草研会報 33・34: 63-67.
- . 1989. 広島県西条盆地のコウホネ類(要旨). 水草研会報 37: 28-29.
- . 1990. あるささやかな願い—せめて西条キャンパスには自然を残してほしい—. 広大フォーラム 22(3): 26-29.
- ・鈴木兵二. 1981. 西条盆地(広島県)における休耕田の植生. Hikobia Suppl. 1: 321-339.
- 田村道夫. 1974. キンボウゲ目の水草. 遺伝 28(8): 25-30.
- . 1982. スイレン科 Nymphaeaceae. 「日本の野生植物. 草本 II. 離弁花類」(佐竹義輔ほか編), 93-95. 平凡社, 東京.

(Received July 26, 1990)

○ 奥山春季 植物採集記録抄 B5判, 142頁. 平成3年4月1日, 奥山春季植物採集記録抄刊行会(千葉県松戸市千葉大学園芸学部・環境緑地学科 藤井英二郎)発行. 非売品。

著者からの挨拶文に「前半を採集記録, 後半を採集旅行記の読物と思い出のアルバムに大別し編集しました。アルバムの項では知友の方々の懐かしい姿に、楽しかった採集会の思い出が蘇って来るでしょう」と述べられている。

私としても本書を拝見していると、御伴したあちらこちらの思い出が目に見えて来て、大変なつかしい。

著者は自分史の一端と言われるが、それはそうとしても、当時その場所に見られた植物が、今ではそこから失われてしまったものが余りにも多い。本書ではこういった具体的な例が記録されている。著者は今こそ稀少種の保存について、真剣に考えるべきであることを暗示しているのではあるまいか。

(里見信生)